公開講演会記録

歴史の転換は我々に何をかたりかけるか？

――2015年ノーベル賞作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィッチの最新作『セカンドハンドの時代』をめぐって

駒澤大学名誉教授・会員　杉山秀子

今年ロシア革命から100年経過、この間、ロシアは驚くべき変貌を遂げた。期せずして米国はトランプ大統領が登場、1917年以来継続してきた世界的主導国の地位を放棄しようとしている。このような歴史的転換点にあたる今日、我々は何を考え、どう行動すべきかは当面の焦眉の課題である。

ここでは、まずあの歴史的ソヴェート政権崩壊の1991年前後の時代的考察と国際関係を元駐米大使であったドブルイニンの回想録、レーガン政治の機密文書などを参考にしてソヴェート政権崩壊の特異性をさぐり、『セカンドハンドの時代』で扱われた時代的特色を浮き彫りにし、その時代を生きたソヴェート人の特色と普遍性をさぐっていくことにする。

米・ソの裏面史をかたどったドブルイニン回想録の中身は？

アナトリー・ドブルイニンは1962年のフルシチョフ時代からブレジネフ、アンドロポフ、チェルネンコ、ゴルバチョフの86年までの24年間、駐米ソ連大使をつとめた。1919年モスクワのモジャイスキー地区の村の金具取り付け工の家庭に生まれる。モスクワ航空学校出身。1944年上級外交学校に入学。45年入党。57年国連事務次長、59年外務省北米局長。71年ソ連共産党中央委員に選出される。ソ連最高会議議長とゴルバチョフ大統領の顧問を歴任。2010年90歳でモスクワにて死去。

冷戦時代の裏面史を研究するには彼の書いた700頁にのぼる回想録

Moscow's Ambassador to Six Cold War Presidents (Univ. of Washington Press, 1995) を読破することは必須である。ドブルイニンの米との秘密裏チャンネルはニクソン時代にはキッシンジャー、レーガン政権の時代はシュルツであった。かつてハリウッドのB級俳優で、良きア

メリカ時代の中間層上がりのレーガンはドブルイニンに関して気取らない信頼の念を以下のように記している。「彼は献身的共産主義者だが、人間としては彼を好きにならずにはいられない。米ソ両国の民衆もその気にさえなれば、核危機の崖っぷちまで追い詰めた相互不信を減らすことができるであろう」（レーガン回想録）。

ゴルバチョフ登場以前のソヴェート政権の面々に対するアメリカ政権の印象はスターリンのイデオロギーの束縛を受けた硬直化したもので軍産複合体に密接に繋がり、米に対する防衛力保持に汲々としていた。一方米は１９７５年のベトナム戦争の敗北により国内経済は疲弊し、社会保障支出の縮小と懲りない軍事費の増大、減税政策は巨額の財政赤字をもたらした。レーガノミクスで小さな政府を標榜したレーガンの願いも潰えた。同時にかすかに残ったケインズ的経済への指標は消えて英のサッチャーとならんで小さな政府で利潤は最大限にもたらそうとする新自由主義の道が開かれた。

レーガンの対ソ戦略

レーガン政権下の対ソ戦略の主柱は対ソ秘密工作であり、ＣＩＡの使えるあらゆる武器を準備、心理作戦、破壊活動、戦略的策略、サイバー戦争などＮＳＣ、国防総省と協調しながら、ソ連の強力なスパイ網を破り、経済を破壊し国家体制を不安定にした。これと同時に１９８３年の戦略防衛構想ＳＤＩはソ連に軍事力競争を扇動する目的に巧みに組織された。

軟弱なゴルバチョフ路線と内部崩壊

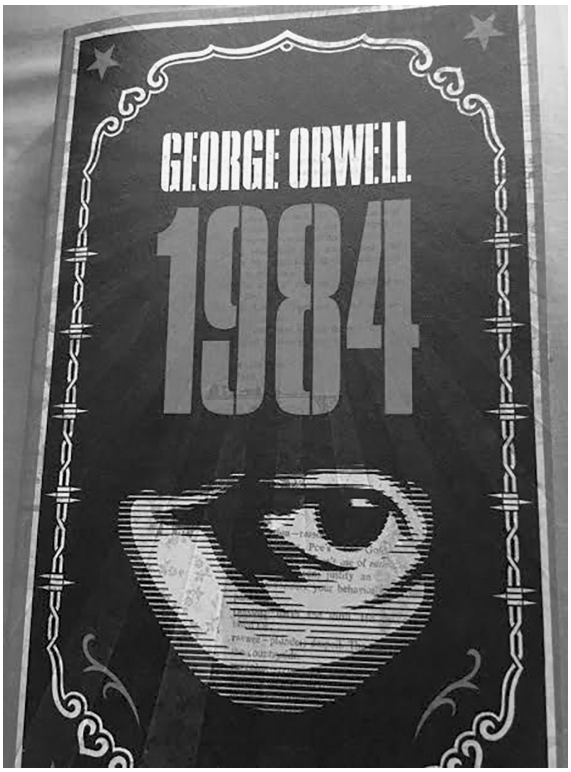
これに対してソ連のほうはレーガンによってしかけられた軍事費増大によってソ連がこの軍拡競争によって破滅したように米政権は思ったようだが、実際はその軍拡競争以上にソ連自身の内的経済上の矛盾によるものだとドブルイニンは結論付けている。ゴルバチョフは社会主義を固持しつつ、経済構造の劇的変化のために新たな市場システムの導入を模索したが、途半ばで終わった。世界銀行の専門家集団が指摘しているようにイノベーションの欠如、低調な投資、自給自足的な経済形態の欠如による内部的矛盾が累積されソ連経済は崩壊の道に突き進んだ。ソ連の運命は国内で決められその最後の命運を担ったものがゴルバチョフであっ

た。具体的政策の順位を取り違え、明確なビジョンを持ち合わせなかったゴルバチョフ路線の失脚は多くのソヴェート人を露頭に迷わせた。

歴史の教訓

こうみてくると、軍拡競争によってソ連経済は疲弊したことは事実であるが、それにもまして内部的理由の方が大であったことは想像に難くない。このことは蛇足になるが、現代の疲弊に喘ぐ米経済のありようが１９７５年のベトナム戦争以降のアメリカの度重なる世界の憲兵としての派兵と軍事費の天井知らずの増加により、中間層の格下げと膨大な赤字による福祉の切り下げをすることにより、米経済が今や青息吐息になっている状況を説明できる。筆者はそう遠くない将来米経済は逼塞し、内部崩壊は避けることはできないとみている。

歴史を俯瞰してみれば、ローマ帝国から大英帝国にいたるまで大国といえる大国はすべて外部的圧力よりも内部的圧力によって崩壊しているのである。ソ連の場合内部的要因とはなんであったか。それは紛れもなく世界の市場システムに適合できなかった計画経済の仕組みと硬直化したマルクス・レーニン・スターリン主義のイデオロギーの政治、社会における適用であった。とりわけ、１９３６年以降のスターリンの台頭によるソ連政治の掌握は甚大な政治的誤りをソ連社会にもたらした。このスターリニズムの誤りをジョージ・オーウェルはディストピア小説『１９８４年』（１９４９年）においてその滑稽な寓意性を遺憾なく証言しているのである。戦争は平和、自由は屈従、無知は力と倒錯した社会を描くことによってオーウェルが生きた同時代人であったスターリンの社会を痛烈に風刺した。



現在米社会では、ＣＩＡによる国民に対するプライバシーと人権の侵害は深く社会の隅々まで侵され、不審と見れば即拉致、検挙、人権侵害の取り調べの状況には知識人はパニックを起こし、彼らの間ではこの寓意小説『１９８４年』がベストセラーになっているようだ。しかもこの現象は米のみならず、元ＣＩＡの職員で現在ロシア滞在を余儀なくされているスノーデンによれば、日本でもマルウェアーが仕掛けられ、日本が米国の意のままにならなければ日本の電力、否原子炉もすべてコントロールが喪失されるとのことだ。更に彼によればＸＫＥＹＳＣＯＲＥというものが仕掛けられ、Ｅメールはすべて透視されるということだ。日本の横田基地に２年間勤務して日本を愛するスノーデンはこのことで日本人のことを痛く心配しているそうである。このような統制社会が身近に展開されていることも思考・

判断力、想像力がなければオーウェルの描いた『Ａｎｉｍａｌ　Ｆａｒｍ』（１９４５年）の中の犬、豚と同じ存在に我々はなりうることだ。

我らと同時代人のアレクシェーヴィッチは何を我々に提示しているか

さてアレクシェーヴィッチについては、作品内容の重大さに比して日本ではそれほど大きくとりあげられてはいなかった。日本がフクシマの大惨事を経験して改めて原発事故を受けた人間の苦悩に焦点を当てられてから見直されたという経過がある。これまで同氏の５作品が日本で翻訳出版されている。

アレクシェーヴィッチはデビュー作『戦争は女の顔をしていない』、『ボタン穴から見た戦争』で第２次世界大戦をとりあげ、対ファシズム戦を戦った英雄としてのロシア人の言説が如何に虚飾にまみれた偽りのものであったかを自ら作品をもって赤裸々に語った。文学の手法としてはジャーナリストとしての氏特有の立場を利用して数万人の人にインタビューした記事を集大成したものである。

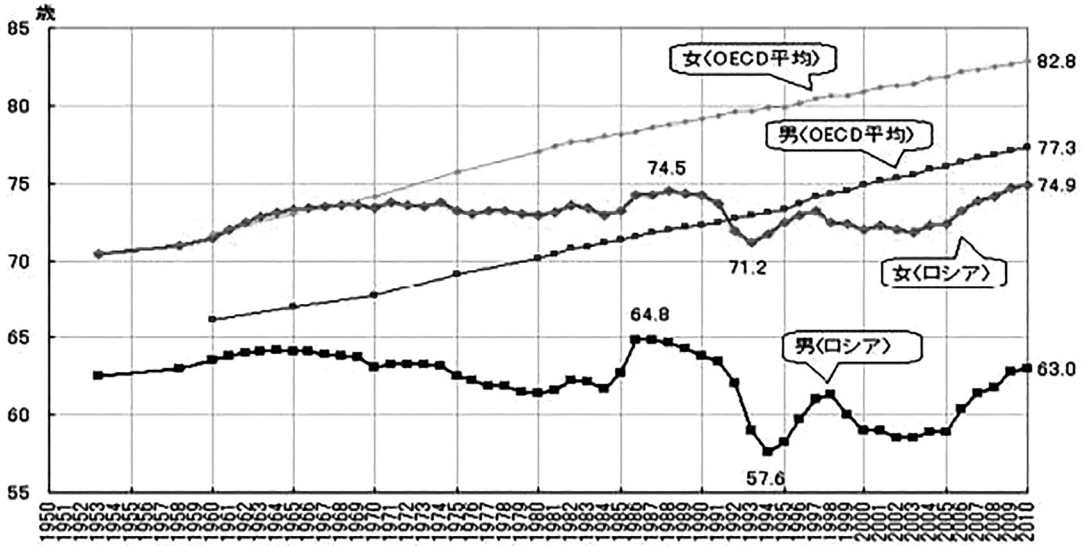
戦争に参加した女たちの多くは志願兵として採用され、それまで受けた社会主義思想の下に祖国に尽くすという定式通りに動くが、その戦争に参加していく過程で様々な生身の人間としての苦悩が描かれている。それらは大祖国戦争の勝利の結果、顕彰されている兵士達の生きざまが美化されたものではなく、むしろ矛盾と過酷さの中で戦った事実が赤裸々に語られている。多くの女性兵士は称賛を得たが、男性兵士の目からは結婚の対象としては見られず、一生ひっそり独身ですごし、世間からも偏見の眼でみられたことも語られている。

『チェルノブイリの祈り』では民衆の声を採録して、並列的に記載するルポルタージュ形式をとっている。

この書はチェルノブイリ原発爆発事故で、放射性物質による大量の放射線被曝を受けた民衆の生の声である。

目に見えない「放射能」への恐怖と無知に由来する「デマ」や「差別」行動に翻弄される醜い姿が描かれ、それが死と隣り合わせであっても、愛する土地、

ロシアの平均寿命の推移



（注）ロシアの1953年、1958年は、それぞれ、1950～1955年、1955年～1960年の国連推計値である。
（資料）World Bank WDI Onlime 2012>6.22（OECD 高所得国平均及びロシア1960年以降）
UN demographic Yearbook 1997 - Historical supplement（ロシア1958年以前）

家畜、家族から離れられない民衆の深い悲しみの姿が話言葉でリアルに描かれている。図表で見る通り、死亡率の高い年は１９９１～１９９４年頃だが実際にはその死亡原因の多くは１９８６年のチェルノブイリの大惨事による被曝が原因だ。

ＩＡＥＡはひたすら事故を過小評価しようとする。そしてそれに輪をかけて、その実態を隠そうとする旧ソ連の政治体制はまるで同じことをする日本政府と東電関係者の姿そのものを描いていて身につまされる。行政機関に真実を申し立てようとすると、その人物は便槽の中に押し込まれ、他殺体で発見された事例や、告発人があたかも自殺したように見せかけた不審死体が相次いで放置されている事例が後を絶たない。

チェルノブイリの事故時は、党幹部は事故を過小評価しようとし、情報はひたすら隠す。学者は「食べても大丈夫。健康に害はない」と口をそろえて嘘をつく。さらに経済的理由のため、避難区域はどんどん縮小される。高汚染地区なのに民衆に〝早く戻って来い〟という日本の行政とまったくおなじではないか。そして経済性のため、食物の放射能基準値を引き上げるということはまさに今日本で同じことが繰り返されていることがわかる。

脳梗塞、心臓病で亡くなる多くの人々、甲状腺を患い、癌になる子どもたち、白血病、脳浮腫になっていく子どもたちが描かれ、罹病の因果関係ははっきりしないと見捨てられる子どもたちのあり様は日本の現実そのものと言っても過言ではない。

１９９７年、上記の衝撃的作品を出版後、アレクシェーヴィッチは２０１３年まで西欧にくらす。２０１３年スエーデンで新著『セカンドハンドの時代』を出版。この作品で２０１３年カナダの女流文学賞エリス・モンロー賞を受賞している。その後、２０１３年にベラルーシに帰国している。

彼女に少なからぬ影響を与えた作家のＢ・ブイコフはガゼータ・ＲＵ・のインタビューで「カタストロフィ、戦争、個人的悲劇を描くとき美辞麗句はあってはならないというのが彼女の私淑する作家、アダモヴィッチ（ファシストーに対する白ロシア人の戦い―長編《屋根の下の戦い》の著者Ａ・Ｍ・アダモヴィッチ１９２７年―）の考えであり、それを見事に踏襲しているのだ」と述べている。

アレクシェーヴィッチは『セカンドハンドの時代』の中の終章《社会主義は終わった。でも我々は生き残った》でナタリア・イグルーノヴァとの対話により、彼女がアダモヴィッチと出会って初めて自分が創作の中でとるべき道が明らかになったと述懐している。自分の耳が聴いた通りのことをつつがなく書くということがあらためて大切であることが氏との邂逅で分かった、と回想している。

アレクシェーヴィッチの聞き語りにおけるリアリズム

ロシア文学には昔から聞き語りのジャンルというものがあり、古くはブイリーナのような形式もあり、一般民衆はたとえ文盲であろうともその聞き語りのフォルクローアを自分達の心のよりどころとして人から人へ語り継いだという。例えばＭ・ゴーリキーの祖母は文盲の吟遊詩人で幼いゴーリキーの枕辺で数限りない聞き語りの話をしてくれたという。彼は幼い時から作家としての才能をみにつけることができたのであろう。アレクシェーヴィッチはさらにロシア文学の尊敬してやまないあの大作家ドストエーフスキーのリアリズムの手法も取り入れている。その手法は単なる写実的手法ではない。

ものをものとして写実的にリアルに描くというのではなく、『カラマーゾフの兄弟』の中の手法をとって、ヒーローとヒーローをただ写実的に描くのみならず、ヒーローとは別の次元に作家の目があり、その作家とヒーローをさらに高いところから凝視している眼があり、その眼の高みからも全体を俯瞰しているという複雑な様相を呈しているのである。評論家の小林秀雄などはドストエーフスキーのこの手法をよく理解し、高くかっているようである。この手法はロシア文学の評論家のバフチンもよくドストエーフスキーの独特なリアリズムの手法を理論化している。

アレクシェーヴィッチはこのドストエーフスキーのリアリズム手法ももちろん意識して作品を書いている。

テープレコーダーを回して、インタビューしながら、インタビューの主人公と手に手を取り合いながら抱擁し、涙する作家の姿、また数百のインタビュー記事を作家的な観点から収録しなおし、問題点を集め、また収録しなおす目もくらむような仕事、収録し、全体を見直した時にさらに高みから天の声を聞きなおしてみる作業と複雑な回廊の中をアレクシェーヴィッチは廻り続けているのだ。

巧みな『セカンドハンドの時代』の構成と登場人物たち

『セカンドハンドの時代』の構成ははっきりしている。第一部黙示録による慰めとし、赤いインテリアの十の話とある。赤いイデオロギーというインテリアの中に閉じ込められていた人々の生きざまを詳細に手際よく描く。体制変換というものは70年間人々をマシーンがひいて砂にした。しかし人はこのマシーンがいとも簡単に壊れるとは思わない。大量の血は流されなかった。１９９１年無血クーデターで終わったことをアレクシェーヴィッチは言っているのだ。またかつては共産主義同盟の宣誓で自分を国に捧げるといった人が今は国をぼろくそに言ったりしているさまを描き、ゴルバチョフは共産主義の墓堀人と吐き捨てるようにいう人、また権力の上層部はもちろん無防備だが、上からの破壊はいとも簡単だと権力上層部の脆さを論評する人間もいた。

アフロメートフ元帥の話もあった。彼は自殺の準備をしていた。彼は赤い国旗の下ではなく、三色旗の下で、皇帝の鷲の下で自殺することはそぐわない。

彼は新しいインテリアにはそぐわないのだ。彼はどこまでもソ連邦の元帥だ。国家に命を捧げることを誓い、賄賂や不正をこよなく憎み、５００ルーブリ以上の外国の贈り物は国庫にすぐ入れてしまう生一本の性格が体制の破滅と同時に自ら生を終わらせることによって清算する。彼女はさらに筆をすすめる。崩壊したのは戦車、ミサイルではなかった。自分達の一番の強み、精神によってだと。彼の取り巻きの官僚たちは次々にエリツインに鞍替えした。まともな人間は時代遅れというレッテルが貼られた。アフロメートフの自殺はついに決行される。最後にアフロメートフ元帥の追悼記事を書いたのは何とあの敵である、アメリカの参謀本部部長のウイリアム・クロウだった。自分とは考えが違うが、彼を尊敬していた。敬意を表すと書いてあった。（コメルサント１９９１年９月１日記事より）このアフロメートフ元帥埋葬後、彼の墓は盗掘されていた。何と人間は貧すれば貪するということだ。これに続くある設計士のインタビューが展開される。「ソヴェート政権は理想的ではなかったが、満足だった。桁はずれの金持ちはいない、しかし貧乏人もホームレスもいなかった。町で瓶を拾ったり、パンあさりなどしなかった。……」別の人の回想「社会主義

政権時代、自分のことではなく、他人のことを考える、自分より弱い人を考える教育を教わる」「穏やかな社会主義が欲しい、人間的な社会主義が欲しい」。別の人は述懐する。「知らない世界を夢見るのは楽しい。でも生きていたのはソ連の現実。ゲームのルールがあって全員がルールに従ってゲームをする。演説する人の言葉は嘘っぱち。自分が嘘を言っているのを皆が知っているのを彼自身がわかっていた」。

女性は赤いインテリアに囲まれていようがいまいが、たくましい。ある女性の言葉「男は自動小銃と戦車しか知らない。女は男よりたくましくなけりゃ。ポーランドや中国に出張って行って買ったり、売ったりするんだよ。家も子どもも一手にひきうけるんだ」。

第二部はソ連政権崩壊以後の１９９１年から２０１２年までのインタビューによる語り。紙数の関係上多くは省くが、崩壊以前のロシア連邦の15の共和国の民族が放り出されたのである。キルギス、カザフスタン、ウズベキスタン人が職を求めてモスクワになだれ込む。そこに見られるのは暴力と差別、偏見。この世の地獄絵巻が展開される。最後にドストエーフスキーのことが引用されているのが印象的だ。「ロシアは広大だ。ロシア人はパンがなくても生きていける。だが愛がなければ生きていけない」。

第一部と第二部でソヴェート政権崩壊の１９９１年を挟んで、様々なタイプのソヴェート人の回想と意見が収録されている。中には米のＣＩＡによってソヴェート政権は転覆されたとはっきり体制崩壊の要因を言う人もいた。しかしどの人間もそれぞれの役割を果たして生きてきたのであるが、結局は冒頭にアレクシェーヴィッチが掲載している言葉―共犯者の覚書というロシア語がきわめて比喩的に使われている。

犠牲者と迫害者は同様に唾棄すべきものである。収容所の教訓はそれが堕落において兄弟の関係にあるということだ。

ダヴィッド・ルセ『われらが死の日々』

いずれにせよ、わたしたちは覚えておかなければならない。世界において悪の勝利に責任あるのは、盲従的に悪をなす人々ではなく、善に仕える精神的に見極めのつく人々であるということだ。

フョードル・スチェブン『起きたことと実現しなかったこと』

冒頭にこのすぐれた哲学的言葉をもってくることはアレクシェーヴィッチの並々ならぬ洞察力をうかがい知ることができる。我々は時代の共犯者なんだということ。加担者ではなく、共に罪を犯しうる人間なんだという言葉はこれから大変な時代を生き延びようとする我々に与えられた含蓄ある手厳しい言葉なのだ。

（２０１７年７月６日・公開フォーラム）

筆者略歴（すぎやま　ひでこ）

早大大学院露文学専修 露文学修士。１９７４年モスクワ大学、１９８４年プーシキ大学一か年留学。駒澤大学にて36年間、ロシア語・ロシア文学教授。現在、駒澤大学名誉教授、ユーラシア研究所理事、その他学会情報委員長。著書『もう一つの革命―コロンタイの事業』（学陽書房）、『コロンタイと日本』（新樹社）、『ジェンダーでみるロシア文学のヒロインたち』（親水社）等。